

茶亭「洗心亭」

洗心亭は、箕輪門のすぐ西、二本松城敷地内の静かな一角にある茶亭です。おもてなしをしたりお茶を出したりするための部屋が 3 つ、準備用の小さな台所、手洗いがあります。洗心亭は、17 世紀に作られた、城内に現存する最古の建物です。

静かな隠れ家から釣り小屋に

現在、洗心亭は霞ヶ城公園の西端の地面が一段高くなっている場所に立っています。北側と東側の障子を開けると、眼下に伝統的な日本庭園が現れ、木々や池、季節ごとに変化する花々の間を曲がりくねった小道が続きます。庭園の一番奥には洗心の滝があり、18 キロメートル離れた山々から二本松に水を運ぶ二合田用水路から直接水が流れ込んでいます。

洗心という言葉は文字通り「心を清める」という意味で、洗心亭とその周辺は明白に城の敷地内の静かな隠れ家として設計されています。元々は「墨絵の御茶屋」（すみえのおちゃや）として知られていた可能性があります；これは城内に存在していたことが知られている多くの茶室の一つです。1837 年、倒壊した洗心亭は近くの阿武隈川の岸に移築され、大名の釣り小屋として使用されました。戊辰戦争により 1868 年に城の残りの部分が焼失したにもかかわらず

らず、洗心亭が残ったのはこのためです。

洗心亭と元武士

戊辰戦争後、老朽化した小屋は元藩士中沢鼎によって全面的に改修されました。明治政府によって藩制が廃止されると、この建物は元武士と商人の金融結社である相生社の手に渡り、「皆宜亭」と改名されました。最終的に、1907年に同じく元武士の山田脩によって、城

跡の敷地内に移転されました；山田脩は、城跡内で一時操業していた製糸工場の建設も任されていました。また、山田は庭園内の洗心滝にちなんでこの建物を今の「洗心亭」と名づけました。

現在、洗心亭は、菊まつりや桜まつりなどの行事が行われる週末には、地元の茶道団体によるお茶の提供などの活動に使用されることもあります。